

デジタルワークスタイルに向かって

Toward the digital working Style

蒋 湧

愛知大学 経済学部

2006年8月29日から9月1日まで、横浜で開かれた Microsoft Tech・Ed 2006 の研修に参加した。近年、毎年開かれる Microsoft Tech・Ed は、参加人数として今年は最大規模になった。「デジタルワークスタイルへの進化」がテーマの一つとしてあげられ、それをめぐる Microsoft の戦略と将来ビジョンが注目されていた。本稿は、Microsoft Tech・Ed 2006 で発表された日本におけるデジタルワークスタイルに関する現状、デジタルワークスタイルへの進化ステップとその進化をサポートするテクノロジーについて、研修報告としてまとめる。

日本におけるデジタルワークスタイルに関する現状

日本における情報テクノロジーの変化は、日本人のデジタルライフスタイルとデジタルワークスタイルから観察することができる。まず、デジタルライフスタイルに関して、日本は世界で最も進んだ国と言える。ほとんどの日本人は第3のブロードバンド段階にいて、非常に進んだデジタルライフスタイルを送っている。そして日本の家電メーカーは明らかに世界を引っ張って、家庭での情報統合、家電との統合デバイスといったダイナミックなライフスタイルを実現しようとしている。

一方、デジタルワークスタイルの普及について、残念ながら日本はアメリカ、ヨーロッパ、そしてその他の西洋諸国と比べかなり遅れている。次には、日本の会社に多く見られる3つの状況を再現してみる。

- 営業マンの名刺から会社の紹介まで、多く見られるのはFAX番号である。デジタルデータに交換できないFAX機器は、多くの欧米諸国でその姿はすでに消えていた。
- 少人数の打ち合わせから多人数部門の会議まで、必ず見えるのは配布された印刷物（資料）である。既にデジタルファイルで作成した初案が、デジタルファイルのままに相手に渡さず、紙の形に変えて相手に渡す。もし、その資料をもう一回使いたい場合、再び文書を入力し、デジタルファイルの形で保存する。デジタル→紙→デジタルと言った日常的に行われる「書類の旅」を観察すると、その問題点は一目瞭然である。
- 日本のソフトウェア会社に対する世論のイメージは、“厳しい”、“きつい”と“帰れない”、

つまり“3つのK”の職場として定着しつつある。欧米諸国のソフトウェア会社のイメージと比べ、その格差は大きい。日本のIT現場の生産効率を徹底的に改善するために、個人レベルデジタルワークスタイルを含め、チーム全体の開発スタイルの進化も迫られている。

デジタルワークスタイル進化へのステップ

スタンドアロンパソコン (Standalone PC) の時代から、社員のデジタルワークスタイルがはじめて現れた。当時ネットワーク技術の普及は、まだ一般職場まで及ばず、ほとんどのパソコンは独立に動作していた。ワープロや表計算などのソフトウェアで作成したデジタルファイルを記憶装置に保存する。社員がパソコンに向け文書を作成したり、社員同士がフロッピディスクを持ってファイルを交換したりするのが初期段階において典型的なデジタルワークスタイルの姿でした。

インターネット時代の到来に連れ、デジタルワークスタイルは **Intermediate** のステップに進化した。職場のパソコンはネットワークを通してお互い結ばれたことで、ユーザー管理、共有スケジュールと電子メールの使用、データベースによる情報共有などは、この段階のデジタルワークスタイルの特徴であった。「メールチェック」はほとんどの社員にとって、朝一番のお仕事になった。

今日、高速な通信回線の普及によって、インターネットは次世代の **Broadband** 時代を迎えた。それに伴い、社員のデジタルワークスタイルは **Advanced** ステップに達している。職場のパソコンは常時に社内基幹システムと接続し、文書管理やコラボレーションによって、社員個人だけではなく、チーム全体の生産性と職場の付加価値を追求するようになった。

今後、無線通信やICチップなど含むIT技術の発展で、環境知覚やユビキタスの進化で、ITは時空多次元の情報時代に突入するだろう。その時代に相応しいデジタルワークスタイルを **Dynamic** ワークスタイルと定義し、どこでも職場の基幹システムと連携しながら安全で、かつ効率的に業務を展開できる。パーソナライズ、高度な検索技術、Webとのシームレスな統合などはキーワードとして挙げられていた。

デジタルワークスタイルの進化へのサポート

いままで、職場における生産性を向上させるには、個人レベルのデジタルワークスタイルが進められてきた。これからは、生産性の向上は、個人レベルからグループレベルへ、そしてグループレベルから組織全体へ拡大していく。そのために、デジタルワークスタイルを支える情報基盤システムも常に進化する必要がある。例えば、情報、知識、人、それらを総合的に検索するための高度な情報検索エンジン、また **Broadband** や無線モバイルなど最新の通信技術を駆使したコミュニケーションとコラ

ボレーション環境、さらに、個人の生産性と組織全体の活動をつなぐワークフローポータブル、様々なテクノロジーを駆使した情報基盤システムが提案されていた。

ワークスタイルの進化を支える基盤システムである Windows Vista、2007 Office System と SharePoint の連携機能を紹介する。

(1) 高度な情報検索機能と社内コミュニケーション機能の連携

✓ Windows Vista に強力なインデックスエンジンが搭載され、高速に情報を検索することができる。検索されたファイルが様々な形式で表示され、特にアプリケーションを開かずに、ファイルの内容を確認できることは革新的だった。また、検索条件を保存することができ、次回の検索はすばやく目的のファイルを見つけ出すことができる。

✓ さらに、Windows Vista と SharePoint サーバーの連携で、イントラネットや社内の多数のファイルサーバーに散在しているファイル、情報と関係者を探し出すことが可能である。例えば、「E-Learning」というキーワードを入力すると、社内イントラネット、各ファイルサーバー、外部 Web サイトと関連 SNS から、E-Learning に関連のファイルや情報を見つけ出すことができる。さらに、E-Learning に詳しい人のリストと連絡先、または関連部署やグループの情報なども提供することができる。

(2) 社内のコラボレーション環境

SharePoint サーバーと 2007 Office System の統合で、または社内ネットワークを通じて、情報の共有、ドキュメントに関するコラボレーション、チーム情報の収集を行うことが可能になる。

✓ 例えば、SharePoint サーバーにスライドライブラリがあり、社内の部門ごとにプレゼンテーションのスライドを共有し、クライアントユーザーの PowerPoint に利用することができ、プレゼン作成の生産性が向上する。また、複数のクライアントユーザーが同時に SharePoint サーバー側のプレゼンファイルに編集作業を行える。

✓ Word と Excel の作業は、インターネット経由し Internet Explorer の上で行えるようになった。MS Office で作成した資料が、ネット上の共同作業者とリアルタイムで共同編集することができる。また、Word と Excel ファイルは、XML 方式で保存することができ、直接に MS SQL のデータベースに格納することが可能になった。その意味で、Word と Excel など、今まで個人環境で行われた作業は、高度な検索技術との連携や、さらに Web とのシームレスな統合などにより、コミュニケーションとコラボレーションを重視したチームワークの環境で行われようになった。

学生 Learning Style の育成

デジタルワークスタイルを進化するのに、人材育成は成功のカギになる。職場の Working Style から連想したのはキャンパスの Learning Style である。時代に相応しい Working Style に対応するには、どのような Learning Style を身につけるべきか？新しいカリキュラムを迎えようとしている愛大の情報教育に、新しい目標が与えられた気がする。今までの Word や Excel などマニュアル学習型の教育を転換し、Learning Style に欠かせない能力の育成に重心を置くべきと、筆者は思う。PC を含めた IT 機器の使用・維持管理する能力、Word・Excel を利用した文書管理とコラボレーション能力、Web 技術とデータベース技術を利用した情報収集・データ整理する能力と PC による通信能力など、デジタルワークスタイルに関わる能力の育成方法は、今後情報教育の課題になると思う。